

美術の基礎的な力を伸ばす授業の創造

1. 美術科研究主題について

(1) これまでの本校美術科の研究（H23～H24）

昨年度までの3か年は、「自ら問う力を育む授業の創造」という全体研究主題を基に、「生徒が主体的に学習し、美術の基礎的な力を伸ばす題材の開発～言語活動の充実を通して～」を教科研究主題として研究・実践を行った。本校の生徒に身に付けさせたい資質や能力と、学習内容のバランスを見極めながら、思考力や判断力、表現力を働かせ、それらの力を培い、これからの生活に生かすことができる美術の学習を身に付けるためにふさわしい題材を考えてきた。表現や鑑賞の課題を解決するための思考力・判断力・表現力等の育成という研究主題に迫るため、「どのような工夫をすればもっとよくなるか」、「この作品のよさは何か」という、題材・授業づくりに取り組んだ。生徒が主体的に考えながら課題に取り組む学習の積み重ねにより、「自ら問う」姿勢を育成できたと思える。

言語活動の充実については、表現および鑑賞の学習において、発想や構想を練るときに言葉で考えを整理することや、作品などについて批評し合ったりすることは、学習を深めるうえで有効な手立てであると考え、計画的に授業に組み入れてきた。発想や構想の力を発揮させる学習活動の場面で、グループで話し合う、発表し合うなどの活動を行ったが、そこで生徒は、他者との交流の中でイメージを広げ、より良い表現への意識をもつことができた。また、美術科におけるビジュアル・コミュニケーション能力の育成と、生活に役立つ美術を実感させるために、視覚的な言語活動も扱ってきた。

(2) 生徒の実態

本校の生徒は、学習活動に対して概して意欲が高く、主体的に取り組もうとする。また、知識も豊富である。美術科の学習においても、同様に真面目に熱心に取り組む。表現の学習では、よりよいものを目指して最後まで粘り強く描いたりつくったりする。鑑賞では、自分の意見を発言し、自分の言葉で記述できている。このような生徒に対して、知識や技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等や、主体的に学習に取り組む態度をさらに伸ばしたいと考えている。

(3) 現代社会における課題

美術が教科として存在する意味は、生徒に創造力を付けさせることと、これまでに受けつがれてきた人類の文化の価値を理解させることにある。表現と鑑賞の学習を通して普遍的価値を学び、新しい時代の価値を生み出すような創造性のある人間を育てている。さらに、美術科は造形的な活動(表現や鑑賞)により他者とかかわり、他者への理解と価値の共有、コミュニケーション能力など、これからの時代に必要な能力を身に付けられる教科である。

自分の価値観を大切にしながらも他者の価値観を尊重する態度や、自分の価値観の押しつけや他者の否定をなくし他者理解によるよりよい人間関係をつくらうとする態度は、現代社会を生きていく上で大切な資質である。これらの力を育てる役割の一つを、美術は担っていると言える。

(4) 全体研究主題から（本校美術科における「深く考える」とは）

美術の学習は、感じ取ったことや考えたこと、心の中に描いたことや願いから主題を生み出し、それを基に発想・構想して創造的に表現していくことと、美術作品や自然の造形のよさや美しさについて自分なりの価値をつくり出すことである。「この題材で表したいこと」を明確にするために、生徒は課題に正対し、主題を生み出し、手を動かし、話し合い、試行錯誤しながら構想を練る。身に付けた知識や技能を生かし、新しい表現方法を試したり見方を変えたりしながら、表現と鑑賞の学習活動を行っている。本校美術科としては、全体研究主題を受けて、学習の多くの場面において「深く考える」ことを仕組んで行きたいと考えている。

では、美術科における「考える」とは何であろうか。美術科の学習は、感じ取ったことや考えたことから主題を生み出し、それを基に発想・構想して創造的に表現していくことであるが、この場合の「考えた」こととは、「内的あるいは外的な要因によって心の中に思い描いたことや願いなど」である。狭い意味で捉えれば「考える」とは、主題を生み出すために「この題材で表したいこと」を明確にすることになる。「深く考える」ことにより、表現したいことについて「もっと伝えたいことは無いだろうか」などと自己批判することも期待したい。

また、感覚的・直感的に表現方法を選択し活動している状態を単に「考える」こととするならば、「深く考える」とは、主題を生み出すときに考えたことについて、発想し構想を練るときや創意工夫しながら表現を試みるときにも自分の感覚を十分に働かせて、形や色彩、材料、光などの性質やそれらから受ける感情などを理解し活用しながら学習活動を行うこととしたい。「深く考える」ことにより、探究的によりよい作品を描いたりつくったりする表現の能力を伸ばすことになる。

鑑賞の学習は、美術作品などに対して自分の価値意識をもって見つめたり、他者と批評し話し合ったりなどして、そのよさや美しさを感じ取り味わうことである。「深く考える」鑑賞は、様々な視点から作品などを捉え直したり、これまでに身に付けてきた知識を使ったり、疑問点について自分から調べたりしながら作品などを見る学習活動である。作品などを理解し深く味わいながらも批判的に見ることを通して、鑑賞の能力がいつそう高まるであろう。

「深く考える」授業を通して、美術科で身に付ける資質や能力を高め、さらに、この経験を積み重ねて継続的に思考しながらよりよいものを目指す態度を身に付けさせたい。

(4) 「深く考える」ための手立て

美術科は多様な価値を求める教科であり、学習内容が限定的ではないので、目指す生徒の姿や身に付けさせたい力が抽象的で曖昧になってしまう危険性もある。そこで、次のような手立てを講じ、授業づくりを考えていきたい。

本校では、「深く考える」授業を目指すにあたり、「自分自身を俯瞰する」ことを授業に取り入れ、自分自身の表現や理解の状態を吟味する経験を積ませるようにしている。

「自分自身を俯瞰する」とは、本校研究全体総論によれば、自分の見方や考え方を客観的に捉えることと、他の見方や考えなどと比較してみたり、異なる立場から見たり考えたりして、自分の見方や考え方を深め広げることである。

美術科の学習において「自分自身を俯瞰する」とは、「自分が本当に表現したいこと」や「その作品の本当の価値」などについて冷静に見つめ直し、思索し追究することである。

実際の学習の場面では、具体的には次のような活動が「俯瞰する」ことになる。

表現の学習においては、主題を生み出す段階で、発想したことをいったん言葉に表したり、他者と話し合ったり、いろいろ試したりすることで、表したい内容や伝えたい内容が自分の中でより明確になる。構想を練る段階では、形や色彩、材料などの特質や効果を理解しながら描いたりつくったりすることで、よりよい作品を目指すことができる。さらに、「この色や形、材料、表し方で、自分が伝えたいことが表せているだろうか」と自己評価し自問する態度も「自分自身を俯瞰する」ことになる。

鑑賞の学習では、新たな視点や価値などに気付き、見方考え方を広げ深めるために、他者の意見を聞いたり話し合ったり、知識を得たりする学習活動が、「俯瞰する」ことである。

これらの学習の手立ては、形、色彩、材料などの効果を理解しながら、全体のイメージをとらえたり自分の表したいことが表現されているか常に振り返ったりするという〔共通事項〕の視点にも通じるものである。

また、本校の校内研究会では、学習の意欲や動機付けについて「課題や問題を目の前にしたとき、生徒の心の中には、『誰かに伝えたい』『それを解決したい』といった気持ちが自然と湧き上がり、それは、学習活動を展開する原動力となるものである。それらを引き出すような課題設定・場面設定、学習過程や学習活動の工夫が重要となる」としている。

美術科においも、学習意欲の喚起や動機付けのためには、生徒がその授業で学ぶ意義を感じ、身に付ける力が生徒と指導者と共有でき、なおかつ生徒自身の心の中から課題に向き合うことができるような課題を設定する必要があると考える。

これらの手立てを取り入れながら、題材や評価規準を設定し、授業づくりを考えていきたい。

(5) 本年度の研究主題

美術の基礎的な力とは、4観点に示されているとおり、関心や意欲を基に発想・構想し、創造的な技能を働かせて表現する能力と、造形的な美しさや作者の心情・意図、表現の工夫を味わう鑑賞の能力である。基礎的・基本的な知識・技能と、思考力・判断力・表現力等を含むこれらの美術の基礎的な能力を身に付けさせるために、本校美術科では、これまでの取組を継続して題材と指導の工夫をすることとした。

まず本年度は、美術科で育む力のうち、発想・構想の能力に焦点を当てる。「発想・構想」とは、見たこと感じ取ったこと、考えたこと、心の世界などを基に、主題を生み出し、形や色彩などの特質や感情などを生かし、創造的な構成をすることである。また、伝える、伝うなどの目的や機能を基に、造形的な感覚と客観的な見方を働かせ、制作の見通しをもちながら工夫していくことである。これらの力を身に付け、伸ばすための研究実践をしていくこととした。

2. 研究の目的

生徒が「思いや意図」をもち、主体的に課題に取り組み、「自分自身を俯瞰」しながら身に付けた知識や技能を活用し、「深く考え」て表現と鑑賞の学習を行うことを通して、自分の表現したいこと、考えたことや理解の状況等を、他者や社会との関係の中で客観的に見つめる態度養い、発想・構想の能力など美術の基礎的な能力をいっそう育てる。

3. 研究の内容

- ① 生徒が「思いや意図」をもち主体的に課題に取り組めるような題材を設定する。
 - ・主体的に意欲をもって表現や鑑賞の学習ができるような題材や授業の開発
- ② 「自分自身を俯瞰」しながら身に付けた知識や技能を活用し「深く考え」て表現と鑑賞の学習を行える授業計画を立てる。
 - ・「自分自身を俯瞰」しながら課題に取り組めるような、ねらいや学習内容などを整理できる、言語活動やワークシートの工夫
- ③ [共通事項] の適切な位置づけによる題材設定や授業の展開を工夫する。

4. 3か年の研究の見通し

今後3か年の研究について、現時点では次のように進めていきたいと考えている。

初年度となる本年度は、「発想・構想の能力を伸ばす」ことにポイントを置き、題材開発や授業の展開について取り組みたい。生徒個々の発想を基に、話し合うなどの活動を通して構想を練ったりする活動をこれまででも仕組んできたが、今年度も発想を引き出すための手だてや、より「深く考え」ながら試行錯誤できるような題材を用意したい。また、美術科における「深く考える」生徒像について、具体的に示せるようにしたい。

2年目は、発想・構想の能力をいっそう高め、創造的な技能を培い自信をもたせる中で、新たな価値をつくりだす創造的な「思考力、判断力、表現力」をもった「創造性に優れた人材」の育成を目指すような授業実践を行いたい。

3年目は、鑑賞の学習に比重を置く。そこでも「批評的思考力」を伸ばしながら、「創造的思考力」を育てると共に、研究のまとめと検証を行いたい。

5. 実践例

第3学年 美術科学習指導案

1. 題材名

「思い出の桐龍祭」～色や形で表そう～（全2時間） A表現（1）（3）

2. 題材について

（1）発想・構想の能力に関わって

美術科においては、課題について生徒が主体的に考え主題を生み出すことから学習が始まるので、まず生徒の主体性や意欲を引き出すことが不可欠である。本校美術科では生徒が課題に向かい作品を生み出す動機づけとなり、自由に発想することができ、なおかつ生徒の実態に合っている題材設定についてこれまで取り組んできた。つぎに大切なことは、主題を基に自由に発想し試行錯誤できるような仕掛けを用意することである。ここでは、生徒の発想力を高め、試行錯誤や創意工夫を繰り返しながら発想・構想の能力を育てるための題材を用意することとした。

発想を促すための手だてとしては、既存のものや価値を様々な視点から見直したり、異質なものの組み合わせ・結びつけたりするなどの方法があり、これまでもそのような題材で生徒も学習してきた。しかしここでは、言葉から発想したイメージを基にスケッチやドローイングをして、それらをトリミングし、組み合わせ、イメージを広げ、主題に合わせて抽象的な表現をするという題材を設定した。

（2）生徒の実態

生徒は、何事においても真剣に取り組む生徒が多い。美術科の学習で真面目に熱心に課題に向かう。表現の学習では、よりよいものを目指して最後まで粘り強く描いたりつくったりする。鑑賞では、自分の意見を発言し、自分の言葉で記述できている。課題の内容を理解し、それに合わせた作品を制作したり記述したりすることは簡単にできてしまう。このような生徒に対して、自分が表現したことを批判的に見直し、よりよい表現に挑戦しようとする態度を付けさせたいと考えている。

さて、3年生としての一年も折り返し地点を過ぎた。学園祭など級友、学年の仲間と共に真剣に取り組んできた行事がほぼ終わり、それぞれの進路選択、進路決定に向けて自分と向き合うこととなる。そのようなときに、この課題を通してこれまでを振り返り、支え合うことができた友達存在を再確認したり、自分の努力を再認識したりできる機会となればよい。

（3）授業について

①学習の内容

本校の学園祭「桐龍祭」の思い出を共通テーマに、それに対する個々の思い、感情などから主題を生み出し、それを基に形や色、描き方で表現する活動である。

第1次では、全員に共通テーマである「桐龍祭」の思い出を振り返り、それぞれの生徒の心に浮かんだ場面について簡単な言葉に置き換える。例えば、ムカデ競走を選んだ生徒は、「速さ」「暑さ（熱さ）」「連帯感」などの言葉が浮かぶであろう。演劇に出演した生徒は「緊張」やスポットライトの「まぶしさ」などを思い浮かべるかも知れない。これらは、作品の主題とまではいえないが、発想のきっかけとなり構想を練るときの基となる大事なキーワードである。他の場面についても同様に、そのときに感じたことを言葉に置き換え、それらをいったんワークシートに記録していく。次に、個々が表したそれらの言葉からいくつか選び、絵の具、筆、刷毛、ローラー・・・などを使い紙（カード）の上に自由にドローイングする。ここでは、形や色、描き方で、言葉から生まれるイメージが表現できることを押さえる。また、ドローイングで出来上がったものについて、もう一度その印象を言葉に変換し、話し合うなどして、言葉と形、色、描き方の関係について確認をし、個々の主題を生み出すきっかけとしたい。

第2次では、それらのドローイングした紙（カード）を切り貼りするなど、組み合わせを工夫して「桐龍祭」の思い出を表現する。そのためには、中心となる主題が必要である。その主題を生み出す際に（つまり自分だけの「桐龍祭の思い出」を探る手だてとして）、表現したいことを言語化したり、

前時の学習活動でドローイングしたカードを選んだりしながら、イメージを固めていく。次に、トリミングしたり組み合わせたりしながら表現意図に合わせて構成していく。

最後に互いの作品を鑑賞し、同じ思い出を共有しながらもそれぞれ違う感じ方や表現方法があるということに気付くようにする。

②主題を生み出す

ここでは、本校の学園祭である「桐龍祭」を共通のテーマとしたが、記憶や思いが共有できており、イメージしやすいと考えたからである。しかし、同じ経験や同じ思い出をもっているが、それぞれ最も思い出深いところや表現したい場面、気持ち、イメージとして浮かんだことはそれぞれ違うであろう。各自がいちばん描きたい場面や気持ち、思いなどが、個々の生徒の主題となる。

その主題を生み出すために、思い出を振り返ったり、文章化したり、話し合ったりする活動を通して、主題を明確にさせる。

③イメージを広げる

授業の展開として、まずは言葉を基に、形、色、描き方でどのような表現ができるのか、いろいろと試みることから始める。そこでは、これまでの経験から、「緊張感にはとがった形」、「暑さ（熱さ）を表す色は暖色」、「スピード感を出すには素早い筆裁き」など簡単に発想するであろう。ここからイメージを広げるために、これまで身に付けてきた技能を生かし、絵の具の使い方を工夫したり絵筆以外の道具を使ったりなど、創造的に試行錯誤させる。つぎに、主題に合わせて、ドローイングしたカードを組み合わせることで表したいことに近づけていくようにするのだが、このような活動を通してイメージを広げ、さらにより表現を探究できるようにしたい。また、目に見えないものを視覚的に表すことへの関心を高め、視覚と言葉の間を自由に行き来できるような美術の可能性にも気付かせたい。

これらの学習を通して、知識や技能を活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等や、主体的に学習に取り組む態度をさらに伸ばしたい。

3. 全体研究と関わって（美術科における「深く考える」とは）

美術の学習は、感じ取ったことや考えたこと、心の中に描いたことや願いから主題を生み出し、それを基に発想・構想して創造的に表現していくことと、美術作品や自然の造形のよさや美しさについて自分なりの価値をつくりだすことである。「この題材で表したいこと」を明確にするために、生徒は課題に正対し、主題を生み出し、手を動かし、話し合い、試行錯誤しながら構想を練る。身に付けた知識や技能を生かし、新しい表現方法を試したり見方を変えたりしながら、表現と鑑賞の学習活動を行っている。

このように「もっとよい表現をめざすこと」「もっと深く（作品などを）感じ味わうこと」など継続的に思考しながら、よりよいものを目指して学習活動を行う姿そのものが、「深く考える」生徒の姿ではないだろうか。

4. 学習指導要領上の位置づけ

A表現

(1) 感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を指導する。

ア 対象を深く見つめ感じ取ったこと、考えたこと、夢、想像や感情などの心の世界などを基に主題を生み出すこと。

イ 主題などを基に創造力を働かせ、単純化や省略、強調、材料の組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練ること。

(2) 発想や構想したことなどを基に表現する活動を通して、技能に関する次の事項を指導する。

ア 材料や用具の特徴を生かし、自分の表現意図に合う新たな表現方法を工夫するなどして創造的に表現すること。

〔共通事項〕に関する内容

ア 形や色彩などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。

イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえたり表したりできること。

5. 題材の目標及び題材の評価規準

(1) 題材の目標

思い出や気持ちを形や色などで表現することに関心を持ち、偶然できた形や抽象的な形や色を基にイメージを広げ、造形的な効果を生かし創造的に表現するとともに、他者の作品から作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り味わう。

(2) 題材の評価規準

美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
<p>表 美術の創造活動の喜びを味わい感じ取ったことや考えたことなどを表現することに関心を持ち、主体的に心豊かな表現の構想を練ったり材料や用具の特性を生かしたりしようとしている。</p> <p>鑑 他者の作品に関心を持ち、主体的に見方や理解を深めようとしている。</p>	<p>感性や想像力を働かせて、感じ取ったこと考えたことや感情などを基に主題を生み出し、単純化や省略、強調、組み合わせなどを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かな表現の構想を練っている。</p>	<p>感性や造形感覚などを働かせて、材料や用具の特性を生かし、自分の表現意図に合う新たな表現方法を工夫したり、制作の順のなどを総合的に考え見通しをもったりしながら、創造的に表現している。</p>	<p>感性や想像力を働かせて、造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り、自分の価値意識をもって味わっている。</p>

6. 指導の計画（全2時間）

次	○学習内容	評価、留意点
1次 (1時間)	<p>学園祭で心に浮かんだ場面を言葉にし、そのイメージを絵の具や筆、刷毛などを使ってドローイングで表そう。</p> <p>○学習の内容とねらいの確認</p> <ul style="list-style-type: none"> 言葉からイメージした色や形をカードに描き、それらを組み合わせ学園祭の思い出を表現すること。 「学園祭の思い出」の一場面を思い浮かべ、そのときの印象や気持ちを短い言葉で表す。 クラス全員でその言葉を挙げ、その中からいくつか選んで、短い時間でカードにドローイングする。 どんな表現ができるか、各自が用紙（カード）に描いてみる。 そのドローイングが、言葉のイメージに合っているか確認する。 <p>○ドローイングをグループ内で鑑賞し、形、色、描き方により感じ方が違うことを確認する。</p>	<p>関 発</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ内で、カードを共有してもよい。 カードの裏に予め言葉を書いておき、振り返られるようにする。
2次 (1時間)	<p>主題を基に前回制作したカードの配置などを考え、切ったり、貼ったりしながら桐龍祭の思い出を表現しよう。</p> <p>○主題を考える。</p> <p>○主題を基に、「桐龍祭の思い出」を表現する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 学園祭の思い出について、前時に描いたドローイングを様々な組み合わせでイメージを広げる。 前時にドローイングしたカードなども使いながら、主題を発想する。 さまざまな組み合わせを試み最も表現したいことが伝わるようにする。 <p>○作品に題名を付ける。</p> <p>○友達が描いた作品について、互いに鑑賞する。</p> <p>○ワークシートにより振り返る。</p>	<p>関 発</p> <p>発 創</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ内でカードを共有してもよい。 思いついた主題を、ワークシートに記入しておく。 <p>鑑 関</p>

7. 本時の授業 (2次)

- (1) 日 時 平成26年10月18日(土)
- (2) 対 象 3年〇組生徒 男子 19名、女子 20名 計39名
- (3) 場 所 山梨大学教育人間科学部附属中学校 美術室
- (4) 目 標

- ・ 色彩や形で表現することに関心を持ち、主体的に主題を生み出し表現方法を工夫して表現しようとする。
- ・ 形や色彩の効果を生かして、イメージを広げ、創造的な構成を工夫し表現の構想を練る。
- ・ 自分の表現意図に合う構成を工夫するなどして表現する。
- ・ 形や色彩などの特徴や印象などからよさや美しさ、作者の心情や意図と創造的な表現の工夫を感じ取り、自分の価値意識をもって味わう。

(5) 本時の展開

時間	〇学習活動 ・活動の内容、指導のポイント及び留意点	題材の評価規準・評価方法				☆「深く考える」ための手立て
		関	発	創	鑑	
導入 5分	<p>〇ドローイングしたカードを見て、前時の活動を振り返る。</p> <p>〇本時の学習内容を確認する。</p>	○				
	<p>主題を基に前回制作したカードを用い、切ったり、貼ったり、配置などを考えたりしながら桐龍祭の思い出を表現しよう。</p>					
	<p>〇本時のねらいを知る。</p> <p>・前回ドローイングで制作したカードを切ったり貼ったり組み合わせたりして、桐龍祭で感じた気持ちや思いを表現する。</p> <p>・色や形、組み合わせだけで、自分の気持ちが表現できるようにする。</p>	○	○			<p>☆「4つの力」のカードを掲示し、特に(発想・構想)を大切にしていることを伝える。</p>
<p>目標 「形、色、組み合わせの工夫で、桐龍祭の思い出を表現する」 → 形や色、組み合わせの工夫によって、イメージを表現してみよう。</p>						
展開 35分	<p>〇主題を考える。</p> <p>・「桐龍祭の思い出」について、前回表したことも振り返り、何を表現したいのか言葉に置き換えながら主題を考える。</p> <p>・一つの場面を中心に浮かび上がるさまざまな感情を付箋に書き、ワークシートに貼る。</p> <p>・一つの気持ちだけではなく、そのときに感じた思いをできるだけ思いおこす。</p> <p>・言葉に置き換えられないような気持ちや胸の奥にしまっておきたいことも大切に扱えるようにする。</p>	○	○	(観察、ワークシート)		<p>☆ワークシートと付箋を使い、表したいことを言語化し明確にする。</p> <p>☆付箋の大きさ、形、ワークシートへの貼り方などを工夫し、そのときの感情が整理でき、制作に生かせるようにする。</p> <p>☆言葉に置き換えられないようなものも、色や形に置き換えられる可能性に気付かせる。</p>

時間	○学習活動 ・活動の内容、指導のポイント及び留意点	題材の評価規準・評価方法				☆「深く考える」ための手立て
		関	発	創	鑑	
	<p>○主題を基に、「思い出の桐龍祭」を表現する。</p> <p>・学園祭の思い出について、前時に描いたドローイングを様々に組み合わせてイメージを広げ。</p> <p>・グループ内でカードを共有してもよい。</p> <p>・様々に組み合わせてイメージを広げる。</p> <p>・最初のイメージを大切にしながら、イメージを広げたり、新たなにイメージを加えたりしながらカードを組み合わせて、台紙に貼る。</p> <p>・主題に向かって、様々に試しながら進める。</p> <p>・組み合わせたものを糊で固定する。</p> <p>○片付け</p> <p>・用具を片付ける。</p>	○	○	○		<p>☆試行錯誤を繰り返す中で、よりよいものを探究するようにする。</p> <p>☆全体的なイメージをもつようにする。〔共〕</p> <p>☆形、色などの組み合わせの工夫により、表したいことを表現できるようにする。〔共〕</p> <p>☆糊で固定する前に、もう一度見つめ直す。</p>
鑑賞・まとめ	<p>○友達が描いた作品について、互いに鑑賞する。</p> <p>・机の上には作品、タイトルが記されたワークシートのみ置き、教室を周りながら全員の作品を見るようにする。</p> <p>・共通の体験でも、人によって感じ方・表し方が違うことに気付く。</p>	○			○	<p>☆他者の発想や表現の意図を感じ取れるように、ワークシートに記録する。</p>
10分	<p>「形、色、組み合わせから、友達の桐龍祭の思い出を想像してみる」</p> <p>→ 気持ちという目に見えないもののイメージが、形や色、組み合わせによって表現されているか確かめ合おう。</p> <p>→ 友達の作品のよさ、おもしろさ、そこに込められた気持ち読み取り、感じよう。</p>					
	<p>○まとめ</p> <p>・数人の生徒に感想を聞き、学習を振り返る。</p> <p>・作品、ワークシートの提出</p>					

8. 育てたい「4つの力」

その授業や学習の場面で、どのような力を発揮したらよいのかを生徒に分かりやすく示す。

学習の場面	描くとき・つくるとき・見るとき	描くとき・つくるとき		見るとき
観点	美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
発揮する力	自分の気持ちや意志を大切にしながら主体的に取り組む	感じたこと、思いついたこと、考えたことを基に試行錯誤して、よりよいものを目指す	いろいろ工夫し、最もふさわしいと思う方法で表現する	いろいろな視点から見つめ、より広く、より深く感じ取り味わう
フレーズ	自分の思いで たのしくやろう！	自分の思いに合わせて考えよう！	自分の思いで 工夫しよう！	深く見つめよう！

9. 主な参考文献

- ・文部科学省「中学校学習指導要領解説 美術編」（平成20年7月）
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 美術）」（平成23年11月）

6. 本年度の研究の成果と課題について

(1) 課題における主題、言語活動について

表現力を培う美術の学習は、まず課題に向き合い、捉え、自ら主題を生み出すことが必須である。今年度は、この主題を生み出すための学習活動に焦点を当てた。しかし、主題さえ生み出せば何でもよいというわけではない。学習者の発達段階やその実態にあった、その生徒なりの主題のあり方について考える必要がある。では、学習の過程の中でいつ主題を生み出すのべきか。課題の内容にもよるが、その順序にきまりはない。例えば、素材に触っているうちに、アイデアスケッチをするうちに、主題を思いつくこともあるであろう。偶然から見つけてもよいのか、主題が先に決めてあった方がよいのか、それは、授業のねらいが何かによる。授業者は、生徒が困らないよう何をどう学んでいくのかを明確にし、この学習でどんな力をつけさせたいか、意図的な仕組みをもって指導することが大切である。

また、今年度提案した授業では、学園祭の思い出にまつわる自分の気持ちを考えて行くために、さまざまに言語化しながら主題を考えていた。しかし、美術では言葉にならない「気持ち」を表したい場面も考えられる。そのような場合、色や形も言語であるといつてもよいであろう。気持ちを文字にしたとたん、その時の気持ちとは変わってしまう、言葉に引っ張られてしまう危険にも注意する必要がある。言葉に置き換えたことがよかったのか、よくなかったのか。言葉にできないものを深く考えることができるのか。など、今後も考えていきたい。

(2) まとめ

言語化して整理できることもあるし、その逆もある。自分自身を俯瞰しながら自分の不完全さが補える。これまでの経験や生徒の発達段階、抽象で表現することにむずかしさなど、アプローチの仕方を工夫するとよい。

構成するとは、ある程度頭の中にないとできないことであろう。深めることについて、単発の授業の中では難しい。言葉で決めてしまうより、いろいろなことを試してみないと、考えが深まったかは分からないであろう。

言語化することについて、その課程が大事で、様々な感情を外へ出して、俯瞰できるようにする。できあがった作品から、その時の感情がいろいろ思い出されるようなものができるとうい。

発想構想の能力と、創造的スキルは、切り離せないものである。発想へ戻ったり行ったり来たりできるとよい。

深く考えるについては、〔共通事項〕の視点を入れなければならない。

作品をアートとして見るのではなく、子どもの学びを見取ること。生徒の主題が分かっているなければ指導(評価)はできない。

アイデアスケッチも言語である。美術科の言語活動には、〔共通事項〕の視点を必ず入れること。